

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	濱 名 潔
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目			
対話的自己論に基づく保育者の自己形成に関するオートエスノグラフィー研究			
論文審査担当者			
主 査	教 授	中 坪 史 典	
審査委員	教 授	七 木 田 敦	
審査委員	教 授	山 田 浩 之	
〔論文審査の要旨〕			
<p>保育者の自己の価値観は、自らの保育を振り返る経験だけでなく、他者との出会いなどの経験を積み重ねることで形成される。このように「経験のなかで自身をつくり上げていく過程」は自己形成と呼ばれ、「保育者になること」と置き換えられる。保育者の自己形成に関する先行研究は、変化・成長が右肩上がりで一様なものとして捉えられる傾向にある。そこで本研究は、研究者養成大学院出身で保育者養成教育を受けていない、保育職に憧れるわけでもない、しかし家業が幼稚園であるため事業継承を運命付けられているという、先行研究が扱ってきた保育者とは異なる保育者（＝筆者）の自己形成を明らかにすることで、変化・成長に対する捉え方について再考することを目的とした。その際、（1）保育職を目指し就職するまでの経験、（2）保育職という新たな環境への移行経験、（3）子どもに対する理解とかかわりを発達させる経験に着目した。</p> <p>第1章では、自己形成の概念を整理し、本研究における自己形成の定義と捉える視点を提示した。先行研究の論考を包括すると、自己形成は他者や環境とのかかわりを通して個人が変化・成長していくことと整理された。また、自己形成を捉える視点として、「外的環境との相互作用（行為や経験）」「他者（人・モノ）」「時間」が示された。</p> <p>第2章では、本研究の理論的枠組みである対話的自己論（Dialogical Self Theory）について論じるとともに、本研究が対話的自己論に依拠する理由を示した。具体的には、対話的自己論では、それぞれのIポジションが影響を受けている外的環境との相互作用（行為や経験）や他者（人・モノ）も自己内の外部ポジションに置いて検討できること、自己形成を自己の様々な側面を包括して検討できる可能性があることを示した。</p> <p>第3章では、本研究の対象と方法について論じた。本研究は対象者を1人にする事で個と社会の関係性にアプローチできること、先行研究が扱ってきた保育者とは異なる保育者として筆者を対象にしたことを述べた。また、質的研究方法論であるオートエスノグラフィーの概要や強み、課題について説明するとともに、本研究がオートエスノグラフィーを採用する理由を示した。</p> <p>第4章では、保育職を目指し就職するまでの経験における保育者（＝筆者）の自己形成について検討した。分析の結果、私立幼稚園を継ぐ筆者にとって保育職に就く過程におけ</p>			

る自己形成は、保育業界で園長として働く保障された未来を見据えたものであること、先行研究が扱ってきた保育者とは異なる保育者（＝筆者）の自己形成として、保育職に就職するも、理想とする保育者像や保育者としての使命感も持っていなかった点が明らかにされた。

第5章では、保育職という新たな環境への移行経験における新人保育者（＝筆者）の自己形成について検討した。分析の結果、その自己形成は大学院の経験に対する意識が希薄化していくプロセスであること、具体的には、「大学院の経験や考え方でカバーしようとする私」（保育者養成教育は受けずに大学院でトレーニングを受けてきた過去の背景）が「保育がうまく進められない私」（保育技術のなさを痛感する新人保育者の現在の背景）に働きかけたものの対処することができず、「頼りにしていた形式知だけでは対処できない」という価値観が構築されていたことを明らかにした。

第6章では、子どもに対する理解とかかわりから保育者の専門性を発達させる経験について、保育士試験で資格取得した研究者養成大学院出身の新人保育者（＝筆者）の自己形成について検討した。分析の結果、自己形成は子どもと先輩保育者の三者関係の中でなされていること、新人保育者が成長するうえでは「できないこと」を受け入れる経験が重要であることを明らかにした。

本研究の学術的意義として、次の点を挙げることができる。

第一に、先行研究が扱ってきた保育者とは異なる保育者の独自性について、具体的には、保育者に対する憧れではなく、家業の幼稚園の事業継承などとの関係から決定されていたことや、研究者養成大学院の経験によって、研究と実践の間に感じる葛藤や子ども理解の難しさが生じていたことなどを明示化したこと。

第二に、保育者の変化・成長に対する新たな捉え方について、具体的には、保育者の変化・成長において物事を捉える際の基準や視点が增加することで、それらが影響しあい、保育者に新たな葛藤や混乱を生じさせることを明示化したこと。

第三に、過去の経験の意味づけとその変容が保育者の変化・成長に影響を与える点について、具体的には、過去の経験に対する意味づけは一定ではなく、外的環境との相互作用（行為や経験）や他者（人・モノ）の影響により変容することを明示化したこと。

第四に、保育者の変化・成長に関して、対象者1人（＝筆者）の具体的な記述と分析を通して「ローカルな知」を提示したこと。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和5年2月10日